検診結果発表

CO中毒症を追跡

はずれる所期の期待

むしろ闘い強めなければ

先ほど、三池炭鉱のCO患者（一酸化炭素中毒）。昭和三十八年の三池大爆発に被災）の検診結果が発表された。三池労組の強い要請が実り、〝三池一酸化中毒検診医師団〟が検診に当たった結果だが、所期の期待どくらべ問題が残り、組合としては右結果をふまえて、かえって闘いを強める決意を固めている。

三池炭鉱一酸化炭素中毒患者検診医師団は、三月十七日同医師団の幹事＝三村孝一・三池鉱業所病院（天領病院）嘱託医が代表として、そのCO中毒症状についての追跡調査結果を発表した。

三池炭鉱では、昭和三十八年十一月九日三川鉱で炭じん大爆発が起こり、そのため死者が四百五十八人、それにCO患者八百三十九人を出したが、こんどのCO中毒症に対する追跡調査は、今も入院中の者七十三人を除き、四百十六人を対象に行なわれた。

この検診・追跡調査はもともと、予病などを併発しては、患者の間から急死する者が続発する現状を黙視しかねた三池労組の強い要求が実って実現したものだった。事実CO患者で死んだ者は、昨年末に三池労組所属患者だけで二十五人にのぼっている。直接の死因はガン、肝臓そのほかの内臓障害、動脈硬化などで、それらがすべて公傷取り扱いさえ受けていない状態できている。だから問題にならぬはずはなく、三池労組がCO患者の一斉検診を要求したのは、そのようなCO患者を苦しめる症状とCO中毒症との関連を明らかにするためだった。

ところが結果について見ると、すでにマスコミで広く伝えられたように、ほとんど旧来のパターンが多く踏襲され、「四百十六名中二百七十九名（六七・一%。約三分の二）に後遺症が認められる」と伝えた。つまり、他の約三分一（百三十七人＝三一・九%）が治っている、と判断されたことになる。

同報告についての詳細にわたる記述ははぶくが、報告書は「おわりに」述べている。

「CO被爆者について、多数から長年経過したあとまで追跡調査がなされたことは外国にもない。本調査結果は、これらCO被爆者の治療および健康管理について重要な資料であるとともに、学問的にもきわめて貴重なデータであると考える」

なお、こんどの検診に参加した医師は熊大医学部神経精神科教授＝立津政順、福岡県立大牟田病院長＝高松勇雄、大牟田労災病院院長＝志田堅四郎、上野芝病院医長＝小鹿原健二、東京都立松沢病院診療部長＝金子嗣郎、同＝雪竹朗、国立菊池病院副院長＝住吉司郎、三井三池鉱業所病院副院長＝川島弘、蓮沢病院院長＝三村孝一（以上敬称略）ら九人。

組合、ただちに見解を発表

以上の結果報告について、三池労組としては新聞発表を通じて〝さっそく「むしろ闘いを強めるべきだ」として、次の考えを明らかにした。

㈠今回の検診は、重症CO患者の宮嶋重信さんをはじめ、患者の死亡が相次ぐ事実を黙過できず、三池労組の強い要求（対資本・対行政交渉）により実現したものである。

㈡それにはむしろ、治療を打ち切られたCO患者の不安を解消し、病状悪化を阻止する期待が大きくかけられたものだった。

㈢ところが結果報告によれば、検診はこれまでの域を出ず、期待したものにいたっていない。

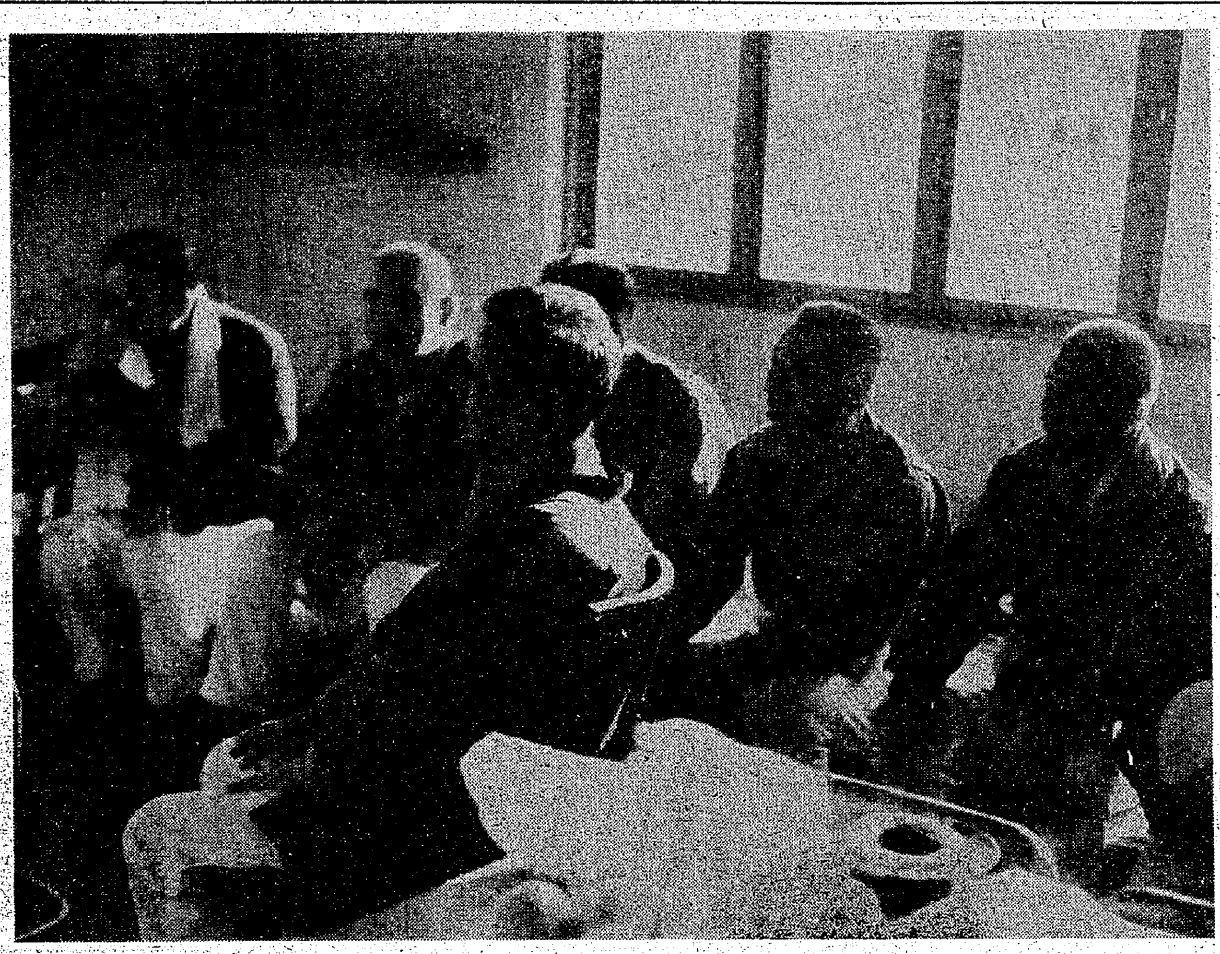
㈣現に、治療を打ち切られた者の現状は、症状を残したまま矛盾の多い社会のなかで苦しんでおり、実態はなま殺しされる形となっている。

㈤しかも報告によると、患者の三分の一が回復しているという。実態がそうであれば三池労組としてよろこばしいことであるが、現実はそうでなく遺憾に思う。

㈥今後はむしろ、こんどの報告をふまえて、死亡した患者の労災認定、治癒打ち切り患者の再発認定などを求め、闘いを強めていくようにしたい。

×

以上だが、CO中毒患者について、右の医学上からの見地ほか社会的・家庭的、そのほかいろいろ複雑な問題のあることを、知っておくべきだ。



大牟田労災病院に入院しているCO患者。治療・機能回復につとめているものの……

手記

今も癒えぬ頭痛・腰痛

×××××××退職者　木村守

救援作業で受けた俺のCO中毒症

侮べつと監視、憎悪感いっぱいの毎日。差別政策激烈。昭和三十八年十一月九日、午後三時十分。その日夜勤で、昼寝の床の中で聞いた爆発音。鈍重な音が地軸を揺がす。

買物帰りの主婦たち。

「三川鉱の坑口で、爆発のあったげなよ」

「ケガ人のでどらすげな」

驕りの中にある資本が、極端に行なう人道無視の極悪作業場への懲役使役。

坑外で爆発と聞いて僕は、条件の良い作業場は新労組員の作業場。坑外は多分に新労組員。「フン、いい気味だ」、瞬間そんな思いが脳裏をはしる。時間は午後六時（?）。民放のテレビニュースに、三川鉱坑口付近にて爆発、数人の負傷者がでた模様、と伝える。

午後七時、NHKニュース。死者がでた様子です、という。

新労ニュースカーが事故をつげ、救援作業を呼びかけて通る。

「俺は入坑せんぞ」、事故の状況を知りたき思い。

七時半を過ぎた夜の道を、いつものように自転車をこぐ。天領橋付近にさしかかった頃、異様に響く救急車のサイレン。右横し、左横し、している感。ただならぬ気を察知する。

三川鉱鉱門付近は、事故を心配した家族たちでもう自転車も通れない。

三川人事の前に自転車を押し倒すと坑口へ。松本薫雄職場分会長が、「いま坑内を見てきた。十数人の遺体を数えた」、という。

坑口には、高田松義新労組執行委員が指揮をとっている。その姿を見ると、入坑していくのが嫌になってしまう。

いったん坑の外へ。三川支部に行く。支部には夫、子、兄弟の身を案じる家族たちの悲壮な顔、もう、いや応いえる事態でなし。

きびすを返して坑内へ。「ここから、遺体を担いで上がっていただきます」、と職制の指示。斜坑六目貫。拉げ倒れ、折れたアーチ枠をくぐり、洗い流されて宙に浮く枕木をとび、担送の遺体。

坑口には消防隊の人たち。もうとび込んできたい気持を、第三者の入坑をはばむ鉱則。綱を張って渡さるるを待つ。

再度入坑。俺は本線運搬工。七目貫より坑底電気機関車修繕場、二階の係員詰所。ここで残留ガスにあったらしい。次いでのぼって行く。支部には夫、子、兄弟の身

一点を照らし動かぬ帽灯の灯は錆綠し人は皆果てていき

凄いのひと言。足のふみ場もない程に、駈けた格好のままに倒れた人。鉱壁にもたれ、そのままずるずると命果てた人。防塵マスクにしばしの命を考えた。

腹に据え得ねば怒れり非番にてわが生きている確かざの中

数日後の救援作業者CO検診、「どうありますか」「頭が痛い、ものの忘れがひどい」。

尿診に異常がなしとカルテには載る頭痛、健忘症は正常なりき

それから六年の間、それまで続けてきた十五年の短歌作りも、激しい頭痛と、すぐ忘れてしまう健忘症に断念。以後病いとの闘い。生きてある限りは頭重の後遺症

三池炭鉱爆発を経る十四年

炭塵ガス大爆発にうけし傷と頭痛は十六年経し今に続く

噛み合わすことが苦痛となる頭痛飯わん置きて堪えて居りにき

定期便のようにくる春、秋季の頭痛。おとろえていく体力に拍車をかける。驕る資本の手にてもたらされた大悲劇。資本主義社会の中で、その罪は誰が償う。……

原告団消息

17日　三池CO患者検診医師団、検診結果を発表。

18日　〝みいけ〟原告団編集会議

21日　梶原定行さん（CO患者）曙病院に入院。

23日　早川静夫さん（CO患者）も同病院に入院。

24日　森秀雄さん（入院患者）の尊父逝去。哀悼の意をささげる。

27日　原告団事務局会議。

投稿お願い

遺族、CO患者、あるいはその家族の皆さん、ただいま私たちの明日の暮らしを決定する重大な春闘が闘われています。闘いに積極的に参加する思いをこめて、本紙を通じ、資本への怒りをぶっつけましょう。

――編集部